
道端に立つ天使

霧乃倫敦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

道端に立つ天使

【Nコード】

N12360

【作者名】

霧乃倫敦

【あらすじ】

僕、山科高志は、4年ぶりに留学先のドイツから帰国してきた。仲の良い弟、颯哉そつやと、感動の再会となるはずだったのに、何故か彼の態度は素っ気なかった。別れた時、中学生だった彼は、すっかり美しい青年に成長している。その後も、彼に微妙に距離を置く態度を取られて、僕は心がざわめくのを抑えられないでいた。

第1話 懐かしい故郷と弟（前書き）

初めてお邪魔させていただきました。霧乃倫敦です。

頭に浮かぶ思いつきり自分好みの妄想を、自分でミーハーしながらそのまま文章にしています（笑）

よろしければどうぞ、お付き合いください！

第1話 懐かしい故郷と弟

第1話 懐かしい故郷と弟

久しぶりに故郷の駅に降り立った。

春まだき、冬の名残の冷たい空気に、車内の温かさに慣れていた身体が、一気に縮み上がる。

ゆっくりと縮まった身体を解き、改めて故郷の空気を胸いっぱい吸い込む。そうして、あたりを見回すと、プラットホームに溢れ出し、そそくさと改札に向かう見知らぬ人々までが愛しく、懐かしいものに見えた。

改札を出るとすぐ、彼の姿を捜した。

（悪いけど、迎えには行かれない）と、連絡は受けていた。

それでも、自分が今回の再会を楽しみにしているのと同じだけ、彼もそうであるはずだと思い、何とか都合をつけてきてくれているのではないかと期待したのだ。

しかし、人ごみの中に目指す姿を見つかる事はできなかった。

…彼は今、大学入試を控えていて、大事な時だ。

僕は諦めて、タクシーに手を上げた。

車窓を流れていく故郷の景色と、昨日までいた留学先のドイツの景色との違いの面白さを飽かず眺める。

音楽に没頭した4年間だった。いくつかのコンクールに入賞することも出来た。この道を志す人間としての基礎を固めた4年間だった。日本で新たなスタートを切ることが決まり、帰国してきた僕の目に、見慣れたはずの故郷の景色が、なんだか新鮮に映った。

故郷の思い出は、そのまま弟との思い出と重なる。

弟の颯哉（そくや）は、僕より7歳下の19歳。4年前に日本を立つ時別れて以来だ。

ちよつと小柄で、伏し目がちな大きな眼をしている。その重そうなまつ毛を、僕と話すとき、少しだけ持ち上げて笑った。

薄く紅い唇の、端だけを持ち上げた静かな笑みで、その内にある白い歯を見せる事は、あまりなかった。

別れたときは、中学生だった。どんな風に成長しているか楽しみだ。

車は繁華街にさしかかった。

弟と、映画や買い物によく一緒に出かけたアーケードのある目抜き通りも、懐かしい場所のひとつだ。

等間隔に並ぶアーケードを支える柱の根元で、幾組かのストリートシンガーが歌っている。その足元の空き缶に、はにかむ彼の代わりにコインを入れたに行った事を思い出した。

町の商店街の、“ファーマシーやましな”と看板を掲げた店の前でタクシーを降りた。僕の実家は、ここで代々、薬局を営んでいる。

「ただいま。」

「高志！おかえり！」

店舗から覗くと、ちょうど客も無く、白衣の両親が駆け寄ってきて、大歓迎してくれた。

「まあ、なんだか大人っぽくなって。ちゃんと食べてたみたいね。心配してたのよ。」

久しぶりに子ども扱いされて、少し照れる。それを隠すように、まとわりついてくる母を適当にあしらいながら、奥に繋がる住居に上

がった。

「おい、ただいまあ！」

階段下から2階の弟の部屋に向かって叫んだが、返事は無かった。

「颯哉は予備校よ。」

後ろで母が言った。その時、ガチャリとドアの開く音がして、階段の上に彼が現れた。

「颯哉!どうしたの、あなた予備校は？」

「行くよ。今から。」

「今まで暇だったんなら、お兄ちゃんを迎えに行つてあげれば良かったのに。」

それには答えず、階段を下りてきた彼は、僕の前で立ち止まると、あの静かな笑みを見せて言った。

「お帰り… 兄さん。」

しかし、それだけで彼は、僕から視線を外すと玄関に向かった。

「晩ごはん、要らないから。」

玄関から声が聞こえた。

「なに言ってるの! 高志が帰ってきたんだから今夜は…」

母は、玄関へ彼を追って行った。が、弟は取り合いもせず出て行っ

たのдарろう。玄関の扉が閉まる音がし、続いて母の小さなため息が聞こえた。

感動の再会は、あっという間に終わった。

「疲れたでしょう？お茶淹れてあげるわ。向こうの話をいろいろ聞かせてちょうだい。」

振り返った母は、勤めて明るく言った。

「そつだ、お土産があるんだ。」

次々と土産をほどこき、はしゃぐ母に、僕は向こうでの生活やこれからの事を話した。すっかり母の気持ちがあぐれたのを見計らって、なんとなく微妙になっている家の空気の原因について、それとなく聞いてみた。

「颯哉、ピリピリしてるみたいだね。入試はいつ？」

「本命の国立は1ヶ月後。あの子、私立は受けないって言うのよ。なに考えてるのかしら。」

「自信があるんだろ？」

「とてもそんな感じじゃないわ。なんだか上の空で…。予備校行ってもちゃんと勉強してるんだか…。」

「…私立で薬学で県外出して…、ってすごいお金かかるじゃん。気兼ねしてるんだよ。すでに一浪してるし。」

「そうならいいけど、…なんだかそういう理由じゃないような気がするのよ。もともと口数の多い子じゃないし、何も言ってくれないからなに考えてるかわからないのよ。」

「…。」

「颯哉が受かつてくれたら、この家も安泰なんだけど。」

両親は、弟に薬局を継いでもらおうと期待している。

颯哉が薬剤師…。気のせいか、なんとなく違和感を覚えた。

「おーい、混んできたぞ！」

店から父の呼ぶ声が聞こえた。母はそそくさと仕事に戻っていった。

僕も荷物をほどこうと、ピアノの横に置いたトランクに手をかけたふと、ピアノを見るとうつつすらと埃が積もっている。

（颯哉…。ぜんぜん、弾いてないのだろうか。）

僕が日本にいた時は、レッスンにも行っていたし、よく弾いていた。彼の奏でる音は、目を見張るような冴えたものではないけれど、いつまでも聞いていたい、そんな音だった。

幼い頃はよく連弾して遊んだ。僕がクラリネットに転向すると、一段と音楽の幅が広がって、彼と合わせるのは楽しかった。

積もった埃を払いながら、さっきの、4年ぶりの再会にはあまりにもあっさりとした彼の様子を思い出していた。

階段の上に現れた彼を見たとき、一瞬、ドキリとした。

スラリと背が伸びていた。もともとの白い肌と紅い唇に、染めて伸ばした髪が驚くほど似合っていた。

ハノーバー音楽大にも目を引く子が何人か居た。颯哉の姿は、ドイツで少なからず感嘆した彼らの容姿と重なった。

その颯哉の姿は、楽しみにしていた再会を軽くあしらうような態度

とあいまって、僕の彼に対する感情を4年前までのただのかわいい弟ではなく、別の感情に塗り替えたようだった。

綺麗になったピアノのふたを開け、昔、彼とよく連弾した曲を弾いてみる。しかし、彼に対する感情が以前のそれに戻る事はなかった。

第2話 4年の距離

朝の食卓に、颯哉そつやは降りてこないかと思ったけど、ちゃんと降りてきて、「おはよう。」と、挨拶しながら席に着いた。

僕は昨日、留学先のドイツから4年ぶりに帰国し、家族との再会を果たした。

日本を離れるとき、弟の颯哉は15歳。まだ中学生だった。

僕たちは7歳も年が離れているにも関わらず、結構、仲が良かった。僕は本格的にこの道に進んだけど、彼も趣味でピアノを習っていた。音大に通う僕に、よく練習を見てくれと、言ってきた。

大学のサークルでのコンサートなどがあると、必ず聴きに來てくれたし、映画に行くと言えば、「ぼくも。」と、ついて來た。

そんな彼との再会を、僕は結構、楽しみにしていた。

ところが感動の再会になるはずだった昨日のそれは、ひと言挨拶を交わしただけの、いともあっさりとしたものだった。

そのときの彼の態度に、僕は微妙な距離を感じたのだが、それが成長の証なのか、それとも受験という时期的な緊張からくるものなのかはわからなかった。

彼は、その距離を両親に対しても置いているらしく、その後、僕はその事について、母から長い間愚痴を聞かされたのだった。

しかし今、家族が揃った食卓で、案外、彼は自然に振舞っている。

「いよいよだな、颯哉。」
「うん。」

父のダイレクトな入試の話題に、思わず僕のほうがドキリとする。しかし、彼は普通に受け止めているように見えた。

「2浪したって構わないんだからな。つまらない遠慮はするな。自分が納得いくまで挑戦してみろ。」

颯哉は、口の端を持ち上げ、微笑で返事をした。父なりの、思いやりのこもった言葉だと、ちゃんと理解している。その静かな所作を、両親は彼らしい肯定だと受け取っているようだけれども、僕には、彼の決して波風を立てない態度の裏に、反発の意思が隠されているような気がした。

日本での僕の新たな活動の場は、
交響楽団。
クラリネットの新人奏者として、この春から所属することが決まっていた。

早速、楽団のある隣県の市への引越しの準備に取り掛からなければならなかった。
役所への手続きや、不動産業者との打ち合わせ、買い物や友人知人への挨拶などに追われた。

彼（颯哉）は彼で、毎日、予備校へ出かけていき、帰りも遅く、せっかく帰国してきたというのに、僕たちはすれ違いの日々が続いていた。

心の隅で、もしかしたら颯哉は、わざと僕と合わないようになっている

るのではないかという懸念がくすぶる。

お互いに忙しく、まとまった時間を共有することが出来ないという言い訳がある事に、僕はむしろホツとしていた。

その一方で、僕の中の彼に対する心配は、日に日に膨らんでいった。彼が僕たちに対して、あるいは他の何かにも、静かに反発しているのは確かだと思う。それはいったい、どこから来ているのだろう。決して自分の感情を、てらいなく現す子ではなかった。

今、表に僅かに現れている小さな反発は、氷山の一角で、その奥で彼の中に大きく広がっているはずだ。そう思うと、胸がざわめくのを抑えきれず、居てもたつてもいられない気持ちになった。

お互いに新生活が始まり、再び離れ離れになる日が迫っている。躊躇している場合ではないと思った。

颯哉の通っている予備校はすぐわかった。

彼と一度、ゆっくり話す機会を作らなくてはダメだ。

そう決心した僕は、授業が終わってから彼を食事に誘うつもりで、父に借りてきた車を予備校の前に乗りつけた。建物に入っていく、受付の女性に聞いた。

「山科颯哉は、何時に終わりますか？」

「山科さんは…、今日はもう帰られています。」

「え…っ？」

「毎日、5時に帰ってますよ。」

衝撃が、全身に走った。

颯哉が帰宅するのは深夜だ。その間、彼はいつたいどこで、何をしているのだろうか。

それも、毎日。

心配は更に大きく膨らんだ。

第3話 ストリートミュージシャン

颯哉に、家族の誰も知らない空白の時間がある。

それは、最近の彼の、家族に対するかたくなな態度と関係がある気がする。

しかし、予備校で聞いたその事実を母に言えるはずもなく、僕はひとりりで、何食わぬ顔をして帰ってくる彼に、どう切り出せばいいのか思いあぐねていた。

そんなある日、僕が日本に帰ってきていることを知った地元の友人から誘いがあり、旧知の仲間で飲みに出かけることになった。

日が落ちた頃、待ち合わせ場所の、アーケード通りの入り口に旧友たちが集まった。そしてアーケードの下、広い目抜き通りを目的の居酒屋へと向かう。

あちこちの柱の下で、ストリートミュージシャンによる路上ライブが始まっていた。観客のまばらなグループもあれば、すでに人だかりのできているグループもある。

久しぶりに会う友人たちとの会話に夢中になっっているにも関わらず、僕の耳にあるヴォーカルの歌声が自然と入ってきた。

何気なく、その歌声のする方を見てみると、そのグループの周りにはひととき大きな人だかりができていた。

音の良し悪しを聴く耳は持っているほうだと自負している。僕は足を止め、そのヴォーカルを見た。

ほっそりした色白の青年だった。

サングラスを掛けているので、眼の表情はよくわからないが、全身全霊でその音楽世界に入り込んでいるのがわかる。憑依型だ。グループは彼を含め3人。ヴォーカルの歌唱力に隠れて気付きにくい、ギターとキーボードの二人もなかなかテクい。

「おい、山科！」

立ち止まった僕を、友人が呼ぶ。

「あ、悪い。」

僕はもう少し聴いていたいという心残りを抱いたまま、友人たちの輪に戻っていった。

飲み会は最高に盛り上がり、僕は久しぶりに思い切り日本語でしゃべり、笑い、騒いだ。楽しい時間はあっという間に過ぎ、2軒目を出たところでお開きとなった。

既に、全ての店のシャッターが降りた通りは、人通りもまばらで、ミュージシャン達も消えていた。

友人と別れ、僕はひとりで気分良くごちゃごちゃとした歓楽街をタクシーを求めて歩いていった。

「もう帰るのか、そうや！」

いきなり耳に入ってきた言葉に、（えっ？）と、思った。

反射的に、声のしたほうを振り向いた。

街灯の下に三人の若者がいる。サングラスの細身の青年が何か答え

ていた。

「あれは…。」

先刻、ストリートで歌っていたグループだ。

「今日の出来はサイコーに良かったぜ。オレ、まだ興奮してんだ。なあ、ちよつと飲んで帰ろうぜ！」

「ごめん。…でも、今夜はホント、気持ちよく歌えたよ。

ユージのギター、ソロのところ、抜群だった。お客さん、どよめいてたね。」

青年はそう言つて微笑^{わら}つと、もうひとりを振り向いた。

「タク、ぼくがトチツたところ、とっさに助けてくれて、サンキユ。誰も気づいてなかったみたいだね。ふふ…。」

あれは…！

あの微笑は“颯哉”じゃないのか！？

僕は駆け寄ろうとした。そのとき、

「しゃーないな。じゃあ、がんばったオレに、ご褒美くれよ。」

言いながらギターの男が、“そうや”のサングラスを取った。

現れた濃いまつ毛が影を落とす瞳は、やはり颯哉のものだった。

男は両手で颯哉の小さな顔を包むと、愛しそうに彼の紅い唇に口付けた。

颯哉も軽く相手の腰に手を添え、目を閉じて受けている。

唇が離れると、颯哉はもうひとりに向き直り、両手を相手の肩に乗

せると、

「おやすみ。」

と、自分からキスをした。

目の前で起こっている事が、真っ白になった頭で理解できなかった。僕は彼らに見つからないように、逃げるようにその場を去った。

どうやって家まで帰ったのかわからなかった。ただ、颯哉の少し開かれた紅い唇だけが、いつまでも鮮明に脳裏に焼きついていた。

第4話 沈黙の優しい波の音

動悸が、いつまでも治まらない。

今までにないほど、動揺していた。

どうやってたどり着いたのかわからない自宅の前で、僕は家の灯りがもう点いていないのを見て、内心ホツとした。寝ている両親を起さないように、今夜は特に注意を払って2階へ上がった。

そして、自室のベッドの中で、もう何時間もまんじりともできないでいる。

寝ようとすればするほど、先刻、遭遇したあの場面が、脳裏に現れ
ては消え、そのたびにわけのわからない苛立ちとざわめきが僕の身
体を駆け巡った。

僕は、颯哉の少し開いた口唇からのぞく白い歯を見た。

ゆっくりと閉じられていく瞳を見た。

細い指が、相手の腰に添えられて、

細いかかどがつま先立ち、颯哉は自ら自分の顔を相手に近づけた。

僕は、そのとき弟の綺麗な顔に、別の種類の美しさが浮かんでいる
のを見た。

「…っ！」

その事を思い出した途端、突然、猛烈な苛立ちが身体を突き抜けた。
僕はグツと拳を握り締め、息を詰めて身体中を駆け巡る怒りを堪え
た。

そのとき、ゆっくりと階段を上がってくる颯哉の静かな足音が聞こ
えた。

思わず、緊張する。

足音は、階段を登りきり、僕の部屋の前を通って、隣の彼の部屋に向かおうとしている。

と、足音が僕の部屋の前で、止まった。

何だ？ 僕は身を硬くした。ドアの向こうの彼も、じっとしている。やがて足音は遠ざかり、彼の部屋のドアが開く音がして、そして閉まった。

（颯哉？ 何か僕に用があったのか？）

壁の向こうで、かすかな彼の気配がする。僕は寝たふりを装って、彼の気配に耳を済ませた。

窓を閉め、カーテンを引く音。着替えているのか、クローゼットを開ける音。やがて、横になったのだろう。ベッドの軋む音が聞こえた。

動悸が、再び高まり始めた。

（颯哉、今まで何してた？ あれから、ずい分時間がたっている。）

隣の部屋から物音がしなくなっても、僕はいつまでも寝られないでいた。

翌朝も颯哉は、いつもと変わらない様子で食事に降りてきた。

リビングのドアが、彼によって開けられた時、僕ははっきりと、自分の中に小さな動揺を感じた。

彼の顔をまともに見られなくて、ちらりと横目で盗み見た。が、そこにあったのは、あくまでもいつもの彼の顔だった。

「おはよう、兄さん。」

と、なにくわぬ顔で、颯哉が言う。
僕は無性に腹が立ち、わざと聞こえないふりをして、冷蔵庫を開け、目的の物など無い庫内を覗き込んだ。

その日の夕方、僕は颯哉の通っている予備校の前に、再び車を乗りつけた。

彼の事が気になって、今日は何の用事もはかどらなかつた。颯哉と対峙する他ないと、決めた。

5時10分前。

先日の受付の女性の話が本当なら、そろそろ彼が出てくるはずだ。待つほどもなく、本当に彼が出てきたのを見たとき、僕の気持ちは複雑だった。

連れ立っている友人もなく、ひとりで出てきた彼は、足早にどこかへ向かおうとしている。僕は急いで車を降り、彼を呼び止めた。

「颯哉！」

「あれ！兄さん！？……どうしたの？」

思いがけない僕の出現に、颯哉はかなり驚いている。

「おまえを待ってたんだ。」

「え？ ……待ってた？」

颯哉の顔が、少し青ざめた。

家族に告げている予備校が終わる時間は、10時。

嘘がバレしていると知った彼は、あるいはその後、自分が何をしているのかという事まで、バレてしまっているのではないかと勘繰った。

のかもしれない。

僕の様子を伺いながら、小さな声で聞いた。

「…何か、用？」

「うん。オレ達、もう少ししたらまた、離れ離れだろ？ 一度くらい一緒に食事でもしようと思つてさ。」

僕はなんでもないように、勤めてさりげなく言った。

颯哉は僕の顔をしばらく見つめ、そして、なんだか観念したようにうなずいた。

「待つて。…じゃ、このあと約束があつただけど、断るから。」

と、ケータイを取り出すと、どこかに連絡していた。

きつと昨日のグループのひとりだろう。

僕は、連絡を取っている彼を横目で見ながら、なんだか自分が彼に対して意地悪をしているような気持ちになった。

まだ5時だ。食事をするには少し早い。

僕は郊外に向かつて車を走らせた。1時間ほど行った所に、高台の夜景の綺麗なレストランがあるのだ。

助手席の颯哉とポツリポツリ、会話を交わす。

4年の間に見違えるようになっていて、正直、驚いた事。ドイツに滞在中、見聞したいろいろな事。高校生活はどうだったかという事。どれも、当たり前障りのない話ばかりだ。僕はなんとなく、一番聞きたいことに触れられないでいる。

颯哉も用心しているのか、自分からはあまり話さない。

しばらく車を走らせるうち、高いビルがまばらになり、やがて右手

に山が、左手に海が見えてきた。
陽が落ち、行く手に並ぶ街灯に灯が入った。

「ね…、あそこの海岸、降りてみようよ。」

初めて、颯哉の方から口を開いた。
海側を見ると、広い砂浜が広がっている。

道路から海岸に降りる階段があり、その前後の路肩が駐車用に広く取ってあった。僕はそこに車を止め、颯哉とともに海岸へ降りた。
僕たちは波打ち際に並んで立った。目の前に広がる真っ黒な海のはるか向こうに、一列に瞬く街の灯が見えた。

僕は、颯哉が何か思う事があって海岸に降りる提案をしたのだと思つて、あえて自分からは何も話さなかった。規則正しく打ち寄せる波の優しい音が、僕たちの間の沈黙を埋めてくれた。
しばらくして、颯哉はためらいがちに口を開いた。

「兄さんはさ、ホントは」

僕はやっと、彼が自分から話し始めてくれたと思つて、なるべく優しい声で返事をした。

「ん？」

彼は眼を伏せたまま、僕とは反対の方の砂浜を覗むように見つめながら言った。

「ぼくが予備校終わってから、何してるのかって、聞きたいんでしょ」

さざ波の優しい音が、僕たちの間に生じた緊張を和らげるように、
繰り返し押し寄せた。

第5話 溢れる思い

繰り返し打ち寄せるさざ波の、ささやくような音は、颯哉の歌声に似ている。

幼い頃からはにかみやで、少ない口数の代わりに眼でものを言うような子だった。

年齢が7つも離れているせいもあって、そんな颯哉と僕は、幼い頃から喧嘩ひとつせずに育った。

ところが今、僕たちの間に、初めて緊張が横たわっている。

僕が留守にしていた4年の間に、何か彼に起こって、彼をこんな風に変えてしまったのだ。

僕は、彼のこんな険しい表情を初めて見た。

彼がこんな風に、吐き出すようにしゃべるのも初めて聞いた。

「…入試が、目前なのに…！ もう既に一浪してるのに、何してるんだ！ ……って、そう言いたいんでしょ？」

しかし、高ぶり、こみ上げてくる感情を、そのまま奔放に口にする事の出来ない彼の性格が、躊躇させるのだろう。
声がわずかに上ずっていた。

「そうじゃないよ…。」

僕はなだめるように、ゆつくりと言った。
が、効果は無かったようだ。
彼の破れてしまった心の堰から、次々と言葉があふれ出た。

「母さんに言われて来たんでしよう？　ひと言、注意してやってっ
て言われたんでしょ。」

母さん、前からぼくの事、じれったそうにしてたんだ。ぜんぜん本
気が感じられないって。

予備校の事聞いて、怒ってるんでしょ！？

やっぱり、ろくでもない事して遊んでたんだって、怒ってるんでし
よ？？」

「颯哉…。」

彼は、なおも言い募る。

「父さんだって…！」

兄さんも聞いたでしょう。　2浪したって構わない。納得いくまで
挑戦しろって。

…つまり、何が何でもぼくに薬局を継げって事じゃない。」

彼は、たまりかねたように僕を振り払って2、3歩駆け出した。

拳を握り締め、海を睨んでいる。

「帰って母さんに言っというてよ。心配しなくてもぼくはちゃんと薬
屋になるって！」

僕は、颯哉に駆け寄った。

その肩をつかみ、思わず彼の眼を見た。

目じりに光るものが浮かんでいるのではないかと思ったのだ。

が、僕は彼の苦しげに寄せられた眉と、かすかに震えている睫毛にドキリとしただけだった。

母は、そんなに彼を追い詰めていたのだろうか。

その時、僕の中に、わずかに両親を責める気持ちが生じた。

同時に、自分だけさっさとイチ抜けして、後を全部弟に押し付けて、いい気になって自分の好きなことばかりしている自分を初めて知った。

「颯哉……。」

僕は、なだめるように彼に語りかけた。

「母さんには、何も言っていないよ。」

えっ、という様に彼の表情が緩んだ。顔を上げて僕を見た。

その眼をしっかりと捉え、僕は言った。

「薬局、イヤなのか？」

言いながら、そうに違いないと思った。当たり前だ。あれだけの歌が歌えるのだ。

「……………」

「ただ、両親の期待の重さが身に沁みている颯哉は、答えられないでいる。」

「何か他に、やりたい事があるのか？」

「それは、歌だろう。知っているよ。と、言ってやるわけにはいかなかった。ストリートで歌っていた彼は、サングラスで顔を隠していたのだ。」

「僕は、彼が自分からその事を話してくれないかと思った。」

「しばらくして、彼はまったく違う事を言った。」

「兄さんは、何故ぼくが予備校、早引きしてるってわかったの？」

「それは、おまえの様子がおかしかったからだ。」

「日本に帰ってきて最初に、そう感じた。おまえ、母さんたちと距離を置いてるだろう？」

「母さんもおまえの事心配してたから、一度話をしてみようと思って、予備校におまえを迎えに行ったんだ。」

「それで、バレたんだね。」

「びっくりしたよ。」

「それで、その後、ぼくが何してるか　っていうのは...？」

「...」

「話が核心に近づいている。僕は、黙って首を振った。」

颯哉は、少し微笑んで言った。 自嘲、にも見える微笑だった。

「…ぼくね、道端で歌ってるんだ。」

「…!」

僕は、初めて聞いて驚いた、というそぶりをした。

「驚いた?…これも母さんには内緒だよ。 聞いたら卒倒するからね。」

ふふ…。と彼は笑った。

「それが、おまえのやりたい事?」

「うん。」

やっと、彼は彼の内側で、誰にも言えずにわだかまっているものを、少しづつ吐き出そうとしていた。

第6話 弟の4年間

僕の実家は、地元で祖父の代から薬局を営んでいる。

父は商店街の世話役もしているし、薬剤師会の理事もしている。店を絶やすなど、考えてもいないだろう。

僕は、早々と音楽の道に進んでしまつて、跡継ぎのリストから外れた。その道が開けた時、僕は有頂天で、その結果、両親の期待が弟ひとりに集中してしまう事に思い至らなかつた。

今、その事で悩んでいる彼を目の前にして、僕は彼に対して、後ろめたさと申し訳なさを少なからず感じていた。

この両親の期待の大きさに對抗するのは、難しいかもしれない。でも、自分の夢は自分のものなのだから…。

彼が歌の道に進みたいと本気で思っているなら、僕も本気で力になつてやるうと思ひ、言つた。

「歌がやりたいなら、そうと父さんに言つてみるよ。」

僕だつて、こうして好きな道に進ませてもらつてるんだ。おまえの事だつて、きつとわかつて…。」

「言えない。」

「どつして?」

「…兄さんのせいだよ。」

「…。」

彼はやはり、後を自分に押し付けて、イチ抜けした僕を恨んでいるようだ。

「颯哉。今まで僕は、自分だけ好きな事をして、おまえの事、気にかけてやらなかった。すまないと思っっている。

おまえ、父さんたちに気遣って、何が何でも、自分が薬局を継がなきゃって思ってるかもしれないけど、そんな事はないんだ。

父さんの反対は、そりゃ厳しいかもしれないけど、僕からも説得するから…。諦めるなよ。」

颯哉は、驚いたように僕の顔を見つめながら聞いていたが、すぐに首を振りながら言った。

「ぼくは、兄さんに薬局を押し付けられたとか、自分だけ好きな事して、なんて思った事ないよ。

それどころか、もっと上に行って欲しいと思ってるよ。兄さんは凄いなって、いつも思ってたんだ。

…この春から、いよいよプロだね。おめでとう。凄いね。本当に…ぼくにはもう、…ホントにもう…、追いつけない所に行っちゃった…。」

言葉の最後の方は、くぐもってよく聞き取れなかった。

何度かさざ波が打ち寄せた。雲が月を隠し、颯哉がどんな表情をしているのかわからないまま、彼の声が聞こえた。

「ぼくの歌なんか、薬局を継がない理由にはならないんだ。」

「…?」

「兄さんみたいに小さい時からいろんな賞を取って、誰にも有無を言わさないような才能を見せ付けられれば、母さんたちだって迷わず応援するに決まってる。

昔から兄さんの活躍には、家中でいつも大騒ぎだったね。母さんたちは有頂天だった。

…ぼくも、花束抱えてる兄さんが、自慢だった。」

あの頃、僕はまだピアノをやっていた。クラリネットに転向したのは、音大に入ってからだ。

颯哉もピアノをやっていた。

彼の音には、いつまでも聴いていた懐かしさや安心感があって、僕は彼の音が好きだった。

「連弾しよう。」と誘うのは、いつも僕のほうからだった。

「兄さんが…、凄すぎるんだよ。」

月は、まだ雲に隠れたままだ。闇の中に、颯哉の妙に悟ったような声が沁みていった。

「ぼくもピアノ、好きだったし、兄さんに憧れてたから、けっこう一生懸命練習したんだよ。だけど、どう頑張ったって兄さんみたいには弾けなかった。

…とうとう、高3の時、やめちゃった。」

包み込むような優しさと、安らかさを持つ彼の音は、その代わりに人の耳を惹きつける華やかさは無い。

彼の音は、確かにコンクール向きではないのかもしれない。パツとしない音楽実績に、両親は薬学部受験を勧めたに違いなかった。

彼の抱えてきたやるせない思いが、ひしひしと僕に伝わる。
でも、その中で彼は見つけたのだ。おそらく、彼が全てをかけても
構わないと思っっているものを。

「でも、…その代わり、歌に出会ったんだろう?」

月光に、颯哉の顔が輝いた。

「うん。今、歌うのがすごく楽しいんだ。ずっと、歌っていたい。」
でも、それはすぐに消え、

「…でも、ぼくは兄さんみたいに、スポットライトの当たるステーションなんかじゃなくて、道端でしか歌えない。…ピアノも挫折してる。何の実績も無いんだ。」

ぼくには、父さんたちを納得させる何の説得力も無いんだ。」

思うように自分の道を歩めない弟の、やり切れない気持ちをなだめるように。

弟のそんな苦しみの一端が自分にあると初めて知った僕の、やはりやるせない気持ちをなだめるように。

繰り返し打ち寄せるさざ波の穏やかにささやくような音が、いつまでも僕たちを包んでくれていた。

第7話 夢よりも、才能よりも

僕は先日、偶然に道端で歌う颯哉の歌声を聞いた。

何気なく通り過ぎようとした僕の耳を捉えたその歌声は、間違いない本物だった。僕は自分の耳に、それなりの自負がある。

今、僕の目の前で、自分の夢と才能と、両親の呪縛の間で悩み、苦しげな表情を見せている弟に、言っただけじゃなかった。

（大丈夫だ。おまえの歌は本物だ。迷わず進め！）と。だけど、言えない。どうしてか、言えない。

道端のステージで、彼はサングラスで顔を隠していた。

そして舞台がはねた後、路地裏で偶然、見かけたのだ。先ほど、僕の心を捉えたシンガーを。

彼の仲間は彼を『そうや』と呼び、サングラスを外した。僕はそこでそのシンガーが、僕の弟であると気付いたのだ。仲間は、彼に口付けた。

（あれが、おまえの恋人か？ おまえ、いつの間にそんなオトナになっただんだ？）

そう、茶化せばいいんだ。それが、普通だ。

それが、出来ない。何故か、出来ない。胸の奥が、ちくりと痛んだ。

沖を舟が通り、荒い波が激しい潮騒とともに打ち寄せた。

颯哉は波打ち際へ歩み寄り、荒ぶる波をじっと見ている。

僕もその背後に寄り、同じ波を見ながら、かける言葉に迷った。でも何か言ってやらなければ、と、半ば無理やりにつけた言葉は、なんだか無責任な響きを帯びた。

「大丈夫だよ、おまえなら…。自分の夢だろ。諦めるなよ、応援しているから。」

僕は自分で自分の言葉に失望しつつ、せめて、そっと彼の肩に手を置いた。

と、電流が走った。…ような気がした。

「市へは、いつ引越すの？」

彼の小さな声が聞こえた。

「月末だ。おまえの2次試験と同じ頃。」

僕は、手を下ろした。颯哉は、ぬくもりの去った自分の肩を見た。

「…もうすぐだね。また、行っちゃうんだ。」

「今度は国内だ。それもすぐ隣の県の市だから、いつでも…」

颯哉が振り向いた。その眼に、僕は思わず言葉を飲み込んだ。

なんて眼だ。

何かを今にもあふれ出しそうに湛えて、妖しく光っている。そして僕を見つめたまま、近づいてきた。

その光に誘われて、身体の奥底で官能の甘い痛みがズキリと疼いた。颯哉の唇は紅い。

疼きは、貪りたいという衝動に変わった。
唇に、濡れた感触が押し付けられるのを待って、僕は弟をかき抱いた。

「ああ…っ」

小さく、声が洩れる。

颯哉は、顔の向きを変えてもう一度、唇を押し付けてきた。彼の漏らした声は、小さく短かったけれども、僕はそこに歓喜の色が含まれているのを感じた。

けなげな声だ。もつと与えてやりたい。

舌を入れようと、彼の歯列を圧した。颯哉は応え、僕の首にしがみつき、その門を開いた。

押し入った舌が、颯哉のそれに迎え入れられる。

「ん…っ」

再び彼の口から、くぐもった声が洩れた。

彼は、僕の首に回していた手でさらに僕をかき寄せ、自分もつま先立ってもつと奥を求めてきた。

僕も本気で犯してやると思った。

そのとき、首筋で蠢く彼の手の感触が、僕の脳裏を突然、冷ました。相手の腰に添えられた颯哉の細い手。つま先立った彼の踵。そして、傍らの男と次々と絡み合っていた彼の、あの時の映像が次々と浮かんだ。

僕は彼を突き放した。

「おまえ、誰にでもこんな事するのか！」

波の中に倒れこんだ颯哉は、何のことかわからない眼をして僕を見つめている。

昨夜のあの猛烈な怒りが、ふたたびこみ上げた。

こいつは淫魔だ。

道端に立って、その声で、瞳で、人々を惑わすセイレーンだ。

「そうやって、だれかれ構わず人を誘うような…！ ちょっと会わない間に、おまえがそんな風になってるなんて、思いもしなかったよ！

バンド仲間のあのふたりとは、1度や2度じゃないんだろう！？」

ひどい言葉だった。

だけど、責めても、責めても、足りない気がした。

彼の衣服が、濡れて身体に張り付き、髪が頬に流れている。彼の、その扇情的なさまが、僕の怒りにますます拍車をかけた。

翌朝、さすがに階下に降りていく僕の足取りは重かった。

家族で囲む朝の食卓で、いつも通り振舞える自信がなかった。

しかし、少し緊張して入っていったリビングに、颯哉の姿は無かった。

彼の分だけ、朝食が用意されていないのを見て、母に聞いた。

「颯哉は？」

「もう出たわ。直前だから自習室行ってくて。

…やる気があるのはいいけど、この大事な時にあの子、風邪なんか引いてるのよ。」

「風邪…？」

「つい、言っちゃったわ。自己管理ができてないって。」

それでも彼は、言い訳ひとつせず、黙って出て行ったのだろう。

「…熱は？」

「え…？無かったみたいよ。」

「様子は？何かおかしくなかった？」

「ないわよ。どうしたの？」

「ふたこと目には受験、受験って、もっとあいつの言うこと聞いてやったらどうなの！？」

母は、きょとんとした目で僕を見ている。

颯哉が可哀想だった。

昨夜、彼を海に突き飛ばしたのは、僕だ。

一方的に彼を責める僕を、颯哉はただ黙って海の中から見ている。帰りの車の中で、途中、コンビニに寄って買ったバスタオルにくるまっただまま、颯哉はついに一言も口を利かなかった。

僕は、深い自責の念に駆られた。

両親の期待で重苦しいこの家で、息をひそめる様にしていた彼を、僕はさらに追い立ててしまったのだ。

第8話 切ない恋のパレード

僕は昨夜、この上もなく酷い言葉で、弟の颯哉と彼の仲間との関係をなじった。

今朝、リビングに降りてみると、彼は風邪を抱えた重い身体で、僕から逃げるように既に予備校に出掛けていた。

僕は、思わず母に八つ当たりをした。

ふたこと目には受験、受験と弟を追い詰めていた両親に反発を感じていた。自分の意志とは違う道を強いられる彼を可哀想に思っていた。

その颯哉に、自分もまた酷い事をしておきながら、その後ろめたい思いを母の態度を責めることで誤魔化した。

母が、いつにない息子の態度を、不審そうに見ている。

結局、僕は母にも颯哉にも、後ろめたい気持ちを抱えることになった。僕は熱いコーヒーを淹れると、母の視線を避け、自室に持ち帰り、ひとくち啜ってため息をひとつついた。

脳裏に、海を背に振り向いた颯哉の、迫ってくる大きな瞳が浮かんだ。紅い唇から目が離せなくなった自分を思い出した。

(ああ……)

彼の漏らした小さな声が、耳に蘇る。

その声は、歓喜の色に彩られていた。そう、感じた。僕は颯哉の本気を感じ、そして自分も、彼と本気で交わりたと思ったのだ。

僕は、彼の口中に深く押し入った。貪り、吸った。

が、僕は思い出した。彼が道端で、軽く挨拶を交わすように、傍らの男たちとキスしていた事実を。もしかして、これもそうなのか？僕は、誘われたのか？そして、難なく落とされてしまっている。なんとこの醜態だ。僕は、いまましい映像を振り払うように首を振り、心の中で舌打ちした。僕の中で、何かのプライドが激しく傷ついた。彼のほんの遊びのキスに、そこまで本気になった自分と、僕を自分の遊び仲間と同列に扱った颯哉に無性に腹が立った。気がつく僕と僕は、彼を突き飛ばしていた。

もうひとくち、コーヒーを啜る。いったい、どういう種類のプライドを傷つけられての怒りなのか、僕はもう、自分でわかっていた。……僕はもう、観念するしかない。ずっと、彼に対して感じているこの怒りが何なのか、もう、認めないわけにはいかなかった。それは、心の奥底にある禁断の匂いにする小部屋に、そんなはずはない、あれは弟だ。と無理やりに閉じ込めてきた感情だった。その扉を、ふいに開けられた。それが颯哉だったのだから、僕に抗う術などなかった。部屋の中で熱く疼いていた、決して認めてはならないその想いは、あつという間に彼に向かって溢れ出し、僕はそれに引き摺られるしなく、そして理性を失ったのだった。

アーケードに、灯が入り始めた。今日も通りは、いくつかのグループにライブ会場を提供している。

颯哉のグループの定位置には、まだいつもの開演時間には間があるというのに、すでに数人の人ばかりができていた。

僕はそこからは見えない、やや離れた所に立ってその場所を見守っていた。

颯哉が現れるのを、じりじりとした思いで待った。

自分でも呆れるほど自分の中で膨らんでいた彼への想いをついに認めてしまうと、それまで自分の感情やプライドや見栄にばかり気を取られていた僕の心に、彼の気持ちを押し量る余裕が生まれた。

それは、彼に対するよくない気がかりとなって胸の中に黒く膨らみ始め、僕はいても立ってもいられなくなってここに来たのだ。

バスタオルにくるまったまま、ついに無言だったあの車の中の重い空気と、僕を避けて朝早く出掛けていった颯哉の態度が僕の胸を黒く塗りつぶす。

僕は、すっかり大人になって、思わずドキリとする綺麗な顔で危うい遊びを仕掛けてくる彼を、4年前までのはにかみやの弟とは、もう全くの別人になってしまったのだと思っていたけど、本当はそうではなかったのかもしれない。

もしかして僕は、とんでもなく彼を傷つけてしまったのかもしれない。

彼にとって唯一の大切な場所である彼の仲間を僕に否定され、颯哉は、もうどこにも居場所を無くしてしまったのではないだろうか。

僕は、一刻も早く彼の姿を確認したかった。

定位置で、追っかけらしい少女たちの歓声が上がった。

見ると、サングラスをかけた颯哉が、他のふたりと笑い合いながら楽器らしい荷物を肩から降ろしている。取り囲んだ少女たちにも、

親しそうに声をかけている。その様子を見て、僕は心から安堵した。よかった。

たとえ、その関係が好からぬものであったとしても、颯哉から笑顔を引き出してきている彼らに感謝した。僕の颯哉への想いが、そのふたりに対してチリチリと黒い渦を巻くのは、抑えなければならぬ感情だと思った。

歌が始まると、人だかりはひとり、またひとりと人を吸い寄せては膨張を続けていく。

僕は再び、颯哉の包み込むような優しい、まるでゆりかごにゆられている様な歌声にあらためて感嘆し、陶醉した。

この心地よさからは、誰も抜け出せない。人々は夢見心地で彼の歌にゆすられ、ゆれているのだ。

歌が、切ない恋のバラードに代わった。

叶うことのない恋の想いをせつせつと歌い上げる彼。僕の脳裏に、そしておそらくその場にいる皆の脳裏に、哀しい恋のイメージが膨らんでいく。

諦めきれない想いを訴え、それでもあなたが好きでたまらないと、歌がバラードのサビに差しかかった時だった。

歌声が、小さな嗚咽とともに途切れた。

夢を破られた聴衆が、ハッと彼を見上げた。

颯哉は片手で口を押さえ、こみ上げてくる嗚咽をこらえていた。

ズキンと胸が痛んだ。颯哉が泣いている。

歌にあまりにも思い入れ過ぎたのか。それとも、僕のせいなのか。ざわめく聴衆。

ギターの方があわてて駆け寄り、おい？と、颯哉の顔を覗きこむ。

しかし、颯哉はうつむいたままだった。
その肩が、小さく震えていた。

第9話 ステージに満ちていたもの

路上での騒ぎは、ストリートシンガーたちにとってこの上もない「法度だ。

ヴォーカルの颯哉が、突然、歌を中断し、嗚咽をこらえている様子を見て、聴衆が騒ぎ始めた。

とつさにキーボードの男が前に出た。

ざわめき押し寄せようとする聴衆を、両手を広げて押しとどめる。

「すみません！ すみません、みなさん！！ 悪いんですけど、今日はこれで終わります！！

ちよつとウチのヴォーカル、風邪ひいてて調子悪いんで。 ホント、すみません！！」

颯哉のそばでは、ギターの方の彼が、おろおろと心配そうに彼をのぞき込んでいる。颯哉は、気を取り直そうとするようにいったん顔を上げたが、そのとたん、「あと、一曲だけ。」「泣いてるんじゃないの？」などの声を上げ、迫る聴衆にひるんだ。

素早くキーボードの男が間に入り、さらに両手を広げ、声を張り上げた。

「すみません！ 今日はホント、もう終わりですってー！！」

そして、人々を押しとどめながら振り返り、ギターの男に向かって叫んだ。

「ユージ！ 早くソウを連れてけ！ いつもの店に行くんだ。俺も

後で行く！」

颯哉たちが去った後も、なおもその場を立ち去ろうとしない聴衆を、キーボードの彼はひたすら謝り、鎮めていた。

やがて、最後まで食い下がっていた常連らしい少女たちが不承々立ち去っていくと、彼は大きくひとつため息をつき、片づけを始めた。僕も颯哉を追おうと思ったが、思い直してひとり残った彼に歩み寄り、声をかけた。

「こんな事は、よくあるの？」

彼は、顔も上げず、手を動かしながら、

「ああ？　ねえよ！　んな事初めてだよ！」

と、乱暴に答えた。

楽器をケースに仕舞い終わると、担ぎながら立ち上がり、僕をチラリと見ると、そのまま仲間を追って駆け出そうとした。僕はあわてて呼び止めた。

「颯哉の兄です。全部、見てたよ。」

えっ？と、彼は振り返り、態度をあらためた。

「あ、どうも。ソウのお兄さんでしたか。　タク、といいます。」

ぺこりとお辞儀をしたが、その顔には、マズい所を見られたという

表情がありありと表れていた。

「颯哉が、いつもお世話になってます。」

「いえ、そんな。…あの、すみません。なんか変なところ、見られちゃって…。」

「うん…。あんまり感情を表に出す子じゃなかったんで、驚いてる。」

…颯哉は、君たちに何か言ってた？」

「いえ…。さっきの事は俺らも突然で、びっくりしてるんです。あの…、でも、俺らが悪いんです。氣イついてやれなくて。いつもと変わんねえと思ってたんですが…。すみません。ご心配かけて。こんな騒ぎにまでなっちゃって。ホント、申し訳ありません！」

彼は再び頭を下げた。

颯哉の様子がおかしいのは、僕が原因だ。僕は少し、後ろめたい気持ちになった。

「あの…、だけどソウは…、いつもはあいつ、ホント、楽しそうに歌ってるんです。」

さっきも言ったけど、こんなことホントに初めてだし…。俺らもソウと演^やるの楽しいし。

なんで泣いたのか、今はわからないけど、ちゃんと話し聞いてやって、それによっちゃ相談にも乗ってやって…。

ソウの事は、俺らがちゃんと氣イつけときます。だからソウを…。」

なぜか、必死に颯哉をかばおうとする彼の様子に違和感を感じて、

僕は、

「颯哉が風邪を引いているのは、本当だよ。」

と、少し微笑みを混ぜて穏やかに言ってみた。

「…あいつを怒らないでやって下さい。」

タクはうなだれて、言った。

「怒る？」

「ソウが路上で歌うの、反対されてるのは知ってます。受験だし、家が継がなきゃだし…、世間体とか、いろいろあるのもわかります。こんなとこで何やってんだ！ってカンジですよね。」

でも、あいつはちゃんと大学行って薬剤師になるつもりでいますよ。マジでプロになろうなんて、露ほども思っちゃいねえ。もったいない！

だから、それじゃダメですか。ソウに歌わせといてやってくれませんか。内緒で歌ってたのは謝りますから。」

…お兄さん、ソウを止めさせに来たんでしょう？」

颯哉は、家の者にはまったく音楽など忘れてしまったように見せかけていた。

この小さい街でバレないように、サングラスで顔を隠し、道端に立っていた。

「そんなに、颯哉にとって歌は大事なのかな。」

「ソウのは…、他の…、たとえばプロになるチャンス狙ってギラギ

ラしてる奴らとか、ただ目立ちたいだけとか、仲間とつるむのが楽しいだけとか…。そういう奴らのは違うんです。

だから、お客さんもだけど、俺らもソウの歌が好きなんです。

俺にはあいつが歌うことによって、何かから救われてるように見えるんですが、…だからあいつの歌は自分だけじゃなくて、聴いてる人も救ってるような気がするんです。

俺は…、ソウから音楽を取り上げたらいけない気がするんです。」

僕の胸にひしひしと伝わってくるものがあつた。

彼らが、颯哉にとってどれだけ救いの場であるかがうかがえた。

それを僕は、汚らわしい！と、叩きつけるように否定したのだ。

彼らの颯哉に対する気持ちの、なんて包み込むように優しい事だろう。それに比べて僕のそれは、なんてとげとげしくて、颯哉を守るどころか、傷つけてばかりきた事だろう。

僕に颯哉の側にいる資格は無い。

「颯哉は、もしかしたら君たちに別れを告げようとしているかも知れない。」

タクの眼が驚きに見開かれた。

「でも、彼には君たちが必要だ。 歌も。

僕は颯哉を止めさせに来たんじゃないよ。 僕も彼の歌には参ってる口なんだ。

両親は僕が引き受けるから、彼がそんなバカな事を言ってきたら、思い直すように言ってくれ。

…颯哉を大事に思ってくれて、ありがとう。」

僕の颯哉をこんなに大事にしてくれている。それが恋愛感情であっても構わない。僕は、本当に心から沸き出でる感謝の気持ちのまま、彼に頭を下げた。

でも、彼の返してきた言葉は意外なものだった。

「そんな風に言ってもらえると、嬉しいですけど…。」

でも、ソウが本当に必要としているのは俺らじゃないです。」

今度は僕が、驚きに眼を見張った。

第10話 ステージに満ちていたもの 2

「ソウが本当に必要としてるのは、オレ達じゃないです。」

タクの声は、少し哀しげだった。

「どうして。僕には君たちが、心から信頼しあっているように見えたよ。」

意外な彼の言葉に、思わず僕は聞いた。

彼らは、颯哉にとって信頼できる大切な仲間だ。

それだけじゃない。彼らは颯哉にとって恋愛の対象でもあるはずだ。その彼らが、颯哉にとって救いでないはずがない。なのに、なぜ彼は、それを否定するような事を言うのだろう。

「もちろん、オレ達は互いに信頼してるし、認め合ってるし、気の合う大切な仲間です。」

…そういう部分じゃ、ソウもオレ達を頼ってくれてると思います。でも、ソウには、決してオレ達に頼る事のできない部分があるんです。

…てか、それは、オレ達がそうさせてるんだけど…。」

最後の方は、述懐のようなつぶやきだった。

「どづいうこと…?」

聞き返されて、タクは口が滑ったと思ったのか、もの思いに沈み込みかけていた顔をあわててもとに戻し、

「あ、すみません。なんでもないです。オレ、ソウ探しに行きます。」
「
と言って、置いていた荷物を取り上げようとした。

「待つて。君は…！」

今、彼は何か大事な事を言いかけた気がして、僕は夢中で彼を引き止めた。

「君は…、颯哉が、何で泣いたのか知ってるんじゃない？」
「…」

もっと、何か言って欲しかった。僕の知らない颯哉を彼は知っている。

颯哉は、自分の夢や進路の事だけで悩んでいるのではないのだ、きつと。

僕は、タクの顔を真剣な眼で見た。
タクは、僕の視線をまともに受けきれずに、眼を逸らしていたが、やがて、言った。

「ソウには、好きな奴がいるんです。」
「……………」

「…それが誰なのか、あいつ、決して言わねえけど。…そうとうマジなんです。」

それに、たぶん、苦しい恋なんです。
さつき、オレ、ソウが泣いたの、突然でわけわかんねえ、って言ったけど、本当は少し心当たりあるんです。」

タクは小さく苦笑いして、僕を見た。

「オレ達の演^やつてる曲って、全部オリジナルで、それも、たいいていソウの作詞作曲なんですけど。」

「曲って、作るとき自分の想いとか、けっこう入っちゃうじゃないですか。」

さつき、あいつが歌ってたのは、あいつが作った曲の中でも、一番思い入れがあるって言ってた曲なんです。」

（決して叶う事のない恋。でも、諦めきれない。あなたが好きでたまらない）

颯哉の歌声が、耳に甦った。

切ない歌声だった。

「何かあったんですよ。そいつと。」
「……」

僕は、しばらく黙っていた。

颯哉には、真剣に想う相手がいた。それは、僕の予想に反して、彼らではなかった。

僕は、僕にとって衝撃的だった颯哉と彼らとのキスシーンを思い出していた。

颯哉にとって、彼らはただの大事なバンド仲間にすぎないというのなら、僕が見たあれは、いったいなんだっただろう。

僕は聞いた。

「…苦しい恋だからこそ、君たちに打ち明けて、相談すればいいんじゃないのか。なぜ、颯哉にとってそれが、君たちを頼れない部分なんだ？」

「それは…」

タクは、口ごもった。

僕は、颯哉と彼らとの間柄を、最初に疑ったとおり、再び、善からぬほうに想像した。

「答えられないのは、君たちがキスしていたのと、何か関係ある…？」

思わず、言ってしまった。

タクの動揺はさらに大きくなった。

「見たんだよ、僕は…。僕が見たあれは…、颯哉にとっていったいなんだったんだ？」

「ソウはそんなやつじゃありません!!」

タクは叫ぶように言った。

「でも、真剣でもないんだろう。彼は、自分から…、君たちにキスしていたよ?」

僕も思わず声を荒げていた。

「…違うんです。オレ達が悪いんです。ソウは遊びでそんな事するやつじゃありません。」

タクは、必死の眼で僕に訴えた。

そうして、うなだれて、消え入りそうな声で続けた。

自分も、ギターのユージも、あり得ないくらいにソウに

参っているんです、と。

募る想いを告げたとき、ソウはしばらく考えてから、そっと、オレの顔を両手で挟み、唇で唇に触れてくれた。

だけど、そこまでで、ゴメンね、これが僕の精一杯。と言ったという。

「オレ達はいいんです。

ソウは…、受け止めてくれるから。オレ達は、オレ達の気持ちをまんま、あいつにぶつける事ができる。

あいつ、ホント、いいやつで、オレ達の事、マジで大切にしてくれます。

仲間として、以上に。」

だけど、自分の想いは、想う相手にひとかけらも受け止めてもらう事ができない。

ソウはそんな辛い気持ちを抱えながら、オレ達の気持ちをできる限り受け止め続けてくれた。

オレ達は、彼の優しさにずっと甘えてきたんです。酷い仲間です。

そのソウが、どれだけ苦しんでも、オレ達は、ひとかけらも救ってやれない。

タクは唇を噛んだ。

ここにも、苦しい恋があると思いつながら僕は彼を見た。

「でも、そばにいてやる事くらいはできますから…」

気を取り直したように彼は言うと、荷物を担ぎ上げ、僕に一礼し、人ごみに紛れていった。

僕は、あの海辺で颯哉と舌先を絡み合わせた時の事を思い出していた。

彼は、僕が抱きしめると、しがみつくように両腕を僕の首に巻きつけてきた。

そして、決して他人には開かないその歯列の門を開いたのだ。

ずっと、僕の中でわだかまっていたものが、融けた。

みるみるうちに、僕の中に颯哉に対する想いが溢れてきた。

僕は、あらためて、ひとり取り残されたその道端のステージを見た。スポットライトも盛装した観客もない、薄汚れた路上。

この片隅で、それでは彼は毎夜、僕を想って歌っていたというのか。あり得ない、実の兄に対する叶わない想いを、誰に告げる事もできずに。

颯哉がたまらなく愛しかった。

すぐにも側に行つて、抱きしめたかった。

堰を切ったように溢れる彼への想いを抱えて、僕はその道端にいつまでも立ち尽くしていた。

第11話 流れゆく恋

すべては融けて、ずっと僕の中でわだかまっていた颯哉への不信は、きれいに消え去っていた。

代わりに、彼への愛しさが、次から次へと湧き出す泉のように、とめどなく湧きあがっては、溢れている。

今までの、不可解でしかなかった彼のさまざまな言動には、すべて彼にとつての純愛のわけがあつたのだ。

そうとは知らずに、僕は彼を誤解し、酷く傷つけてしまった。

その事に対する心臓を捻られるような激しい後悔に胸を押し潰され、僕は耐え切れず、吐息とともにそれを口から漏らした。

食卓テーブルの向かい側で、今日一日の店の帳簿をつけていた母が、それを合図のように顔を上げると、たまっていたものを吐き出すように愚痴り始めた。

「遅いわ！ 颯哉ったら。予備校はとっくに終わってるはずなのに、何してるのかしら。」

「…」

「ケータイにいくらかけても返事が無いのよ。入試まであと一週間よ！？ 風邪をこじらせたらどうする気かしら。」

高志、颯哉の居場所に心当たりは、ない？」

反応の無い僕に不満を感じて、母は名前を呼んで、僕の注意を促した。

僕は、相変わらずの颯哉に対する母の態度に、心の中で思わずため

息をつき、逆なできるようにわざとゆっくり、

「あるわけないだろ。僕はこないだ、日本に帰ってきたばかりだよ。」

と言った。

颯哉は今、大切な仲間の助けを借りて、ずっと心に抱えてきた壁を乗り越えようとしているのだ。それを、今の母に言うつもりは無かった。

それは、受験どころではない、彼にとって大きな意味のある時間なのだから。

ふと、僕の脳裏に、傷ついた颯哉を、どこか僕の知らない場所であふたりが痛ましそうに取り囲んでいる図が浮かんだ。

僕は、言いようのないもどかしさに胸をよじられた。

僕が、当事者だ。彼を傷つけたのも、彼の悩みの原因も僕だ。なのに、その彼を、僕は人任せにしている。

僕は、母に顔を背け、唇をかんだ。

その時、電話が鳴った。

こんな夜更けに固定電話が鳴るなんて、きつとただ事ではない。颯哉の事かもしれない。僕は、応対に出る母を見守った。

「はい。…そうですね。え？…ちょっとお待ちください。」

母は振り返ると、僕に受話器を差し出した。

「タクって人から。…お友だち？」

僕は、急に心臓が高鳴るのを覚えながら、

「ああ、まあ、そんなところ。」

と、電話を子機に切り替え、それを持ってリビングを出た。自室に戻りながら、

「もしもし…?」

と、全神経を集中させて電話に出た。

「お兄さん、ですか? あの、…タクです。」

タクの声は、張り詰めていた。

「さっきはどうも…。 すみません、突然。」

「大丈夫だよ。 颯哉が、どうかしたの?」

僕は、ドキドキしながら彼の言葉を待った。

「今、オレ達、さっきのライブやってた通りの近くにある公園に居るんですけど…。」

「ああ、公園ね。」

「そうです。それで…」

あ、ソウは落ち着いてます。取り乱してるとかもないんですけど、じっくり話を聞いてやる、っていう雰囲気にもちよっとなってなくて…。

それで、もうこんな時間だし、送るって言ったんです。

そしたらあいつ…、家には帰れない、って…。」

「…!」

僕の胸がキリリと痛んだ。

「それじゃ、オレ達ん家来るか？ ってホントは言ってるやらないんですけど、そういうわけにもいかない状況に…、実は今、なってる…。」

「タク…？」

「すみませんが、お兄さん、ソウを迎えに来てやってくれませんか？」

何かあったのだ、とタクの口調は言っていた。

僕は家を飛び出した。

夜更けても、まだ帰宅しない受験生の次男に加えて、夜中に突然、外出する長男に、何か背中止めどなく母が文句を言っていた。

電話を切る前に、タクに聞いた。

「颯哉には、僕が迎えに行く事、言った？」

「いえ。これは、オレの判断です。ソウにはなにも…！」

颯哉に言えば、彼はきつとその場から逃げ出すだろう。

僕はタクに口止めするつもりで、聞いたのだけど、なんだかそうするまでもなく、彼は解っているような感じがした。

タクシーの中で、僕は颯哉に会ったら、どんな風に声をかけようかと思ひ悩みながらも、イライラとシートから身を乗り出していた。車を降りるなり、公園に向かって走った。

と、入り口の街灯の下で、タクが待っていた。

彼は、走り寄ってきた僕を見ると、小さく頭を下げた。その顔には、

僅かに苦渋の色が浮かんでいた。

「すみません。…オレ達じゃ、やっぱ　ダメです。」

「何か…あつたの？」

「実は、あれから　」

タクは、先ほど僕と別れてからのことを、かいつまんで話し始めた。

ソウは、ユージとあの騒ぎを抜け出した後、いつもの店に行こう、と言うユージに首を振ったらしいです。

もう大丈夫、ひとりで帰れるから。という彼を、だからってほっとくわけにもいかず、仕方なくユージは公園に彼を連れて行っただんです。

ケータイに、そうメールが入ってたんで、オレは公園に向かった。人気のない、真夜中の公園で、オレはあいつらを見つけて…！　思わず駆け出した！！

だって、あいつら、なんかもみ合ってたんです。　なにやってんだ！って声をかけようとした時、ソウが叫んだんです。

「兄さん！」
って。

オレは、ユージを殴り倒して…！

そこまで話して、タクは沈黙した。　　ややあつて、

「バカヤロウが…！」

と、小声でつぶやき、自分を鼓舞するように息を吸い込むと、僕と向き合い、話を続けた。

ユージは…、あんまりソウが、大丈夫だから。って、言い張るもんだから…ちょっとカツとなっちゃったんです。

こんなに、マジですげ心配してんのに、大丈夫だからもういいはないだろ！？　こんな時にも、おまえは、まるでオレ達を頼ってくれないんだな、って思ったとたん、頭に血が上っちゃって…、ソウに…その、乱暴しようとしたんです。

僕はなんと言っていていいか、わからなかった。
タクが、

「すみません…。」

と小声で言い、そしてポツリと続けた。

「ソウの好きな相手って、…お兄さんだったんですね。」

第12話 恋が狂う時

「やべ！ 相当、時間くつちまった。」

タクが、我に返ったように声を上げた。

「ソウたちには、ちょっと自販機行って来るって言うてあるだけなんです。」

タクはきびすを返し、行きましよう、僕を促した。

「ユージのやつには、さっきのオレの一発が、まだ効いてると思いますけど、あんまりあいつらをふたりきりにしとくのは、まだ……ね。」

と、タクが苦笑いした時だった。

彼の懸念が的中したように、公園の奥からかすかに、だがはっきりと言い争う声が聞こえてきた。タクが、弾かれたように駆け出した。

僕も、追って走った。

広い公園だ。中央の大きな噴水をはじめ、なにかのモニュメントや、ベンチ、生垣に仕切られたあずまやなどが街灯に照らし出されている。深夜の公園に、人影はほとんど無い。

タクは、あずまやのひとつに向かって、後も見ずに走っていく。

言い争う声が、しだいにはっきりと聞こえてきた。

「嫌だ!! おまえが誰が好きだろうと関係ないんだよ! おまえは、オレたちに勝手におまえを好きでいさせてくれれば、それでいいんだ! 今までだって、それで問題なくやってきたじゃないか!

なんで、解散なんてする必要があるんだよ!!」

「……」

「だから、さっきは、ちょっとカッとなっただけなんだよ! もう、しないからさ、な!? 信用しろよ!」

「……」

あずまやの向こうから聞こえてくる少し甲高い声は、ユージのものだろう。颯哉も、なにか言っているが、なんとやっているのかはつきりしない。

先に行くタクが、あずまやを回ってその向こうにいる颯哉たちのもとに消えると同時に、

「何やってんだ!?!」

と、ふたりの間に割って入る彼の声が響いた。

僕も、続いてあずまやを回りこんだ。対峙する三人の青年の姿が、目に飛び込んできた。

タクと颯哉は、こちらに背を向けている。タクが、颯哉をかばうように自分の後ろに押しやった。

「ユージ! おまえ、何やってんだよ。ソウをそつとしいてやれって、言っただろうが!」

タクの表情は見えなかったが、体をよじるようにして叫んだその声

には、情けなさが滲んでいた。

「だって、タク！ 何とかしてくれよ！ ソウが…！ ソウが、解散しよう、って言うんだ！ オレは嫌だよ！ 絶対、嫌だからな！！」

見覚えのある、あのギターの青年が、タクに訴えるように叫ぶ。その切羽詰ったような表情が、なんとなく僕の背筋を震わせた。タクが、本当か？というように颯哉を振り返った。

颯哉は、すまなそうに彼の視線から目をそらせ、下を向いた。タクは、しばらくその顔を見ていたが、やがて、ユージに向き直ると、彼に言い含めるように言った。

「そうだな。 オレもそれがいいと思う」

ユージの表情が凍りついた。

彼が、こぶしを震えるほど強く握り締めるのを、僕は見た。

しばらくの間があって、

ゆらりと、ユージが動いた。とっさに行く手をさえぎろうとしたタクを払いのけ、腕を伸ばすと、颯哉を引き寄せ、抱きしめた。

「ユージ？ 何するの…？」

「離さないぞ、ソウ！ 誰がなんと言ってもオレはおまえを…！」

首を振り、細い身体をもみ絞るように、何度も僕の颯哉をかき抱いている。

僕は思わず、やめろ、と叫んで彼らの方へ駆け出した。

颯哉が、首をよじって振り向いた。

「兄さん……っ!？」

大きく見開かれた彼の瞳に、激しい狼狽の色が浮かんだ。

「放して！ お願い、ユージ！」

颯哉は、ユージの腕をふりほどこうとしたが、かなわないと知ると、いましめられたまま、そこにあるユージの横顔を見、それからタクを見た。

そして、僕の誤解を決定的に証明する、どんな言い訳もかなわないこの場の状況に、彼は小さく絶望の声を漏らし、首を振った。

「あんたが、ソウの兄貴……?」

ユージが、挑戦的な強い光を放つ眼を僕に向け、言った。

「そっだ……!」

「……あんた、どんな風にこいつをフツたんだよ?」

「……?」

颯哉が、やっと彼の腕を振りほどき、崩れるように二、三步逃れると、そこに倒れこんだ。タクがあわててその背中に手をやる。

ユージは、そんな颯哉をいたましそうな眼で見っていたが、やがて、僕に向き直り、言った。

「ソウはさ、泣いてたんだよ。ステージの上でさ、あんたの歌を歌

いながら。

今までこんな事はなかった。ソウはあなたの事が好きだったらしいけど、しょせん、叶わない恋だって諦めてたんだ。道端で、あなたを想って歌うのがせめてもの慰めだったんだ。

それが、それさえも出来なくなっただって……、あなたが日本に帰ってきたとたん、こんな事になったって、どういうことだよ？

つまり、あなたが何かでソウの気持ちを知って、それで、こいつをこっぴどくフツたって以外、考えられないじゃないか！

男同士で、しかも兄弟でなんて、ありえない！ 冗談じゃない！ 汚らわしい！ そんな風にののしったんじゃないのかよ！？」

「そんな事は……」

ユージの勝手な妄想は、まるで当たっていない。しかし、僕は、全面的に否定する事も出来ないで、口ごもった。

「そうじゃない、ユージ！ 悪いのは、オレ達だったんだ！

オレ達がソウの優しさに甘えて、オレ達の気持ちをソウに受け止めさせていたのが、お兄さんの誤解を生んだんだ！」

タクが訂正してくれた通り、僕は颯哉たち三人の関係を誤解していた。そして、誰にでも身体を許す、汚らわしい奴！と颯哉をのしった。そういう意味では、ユージの言う事は当たっていたのだ。

しかし、ユージにはタクの言葉など届いてはいないようだった。自分の頭の中で渦巻いている、とつてい受け入れがたいひとつの事実
に支配されている。

「こいつはさ……、もう、歌えないって言うてんだよ……っ！

第13話 それは、天使

「じゃあ、今度のことは、とりあえず警察沙汰にはならずすんだってわけ……？」

「ああ。示談つてことで。ちょっとした仲間うちのいさかいだつて言い張つたら、ケーサツもたいがいにしとけよ、って、引き上げて行つたよ」

「よかつた…… で、ユージは……？」

「おまえたちふたりが救急車で運ばれていったあと、さすがに正気に戻つてさ。

そしたらとたんにおろおろし始めて。……そうとう取り乱してた。とんでもない事しちまった、って。もともと気の小さいヤツだからな。何とか落ち着かせて、家に送つてきたよ」

「ごめん。……迷惑かけて」

「バーカ。それよりおまえ、ケガのほうはどうなんだよ？ お兄さんも、さ？」

「うん……。ぼくは大丈夫。兄さんは……、2箇所切られて、ひとつがちょっと深くて、5針縫つた」

「あいつが持ってたの、ピックだろ？ 案外、切れるもんなんだな」

「うん……」

朦朧とした意識の向こうで、そんな会話が聞こえた。やがて、どこかで扉の閉まる音がして、ふたたび訪れた静寂に引きずり込まれるように僕はまた意識を失った。

それからどのくらい時間が経ったのだろう。閉じたまぶたの向こうで、ゆらゆらと光が踊っている。その光に呼び覚まされるようにして、僕は再び意識を取り戻した。

重いまぶたを持ち上げると、半開きの視界に、窓辺で揺れる白いカーテンと、そこにたたずむひとりの青年の姿が映った。カーテンが揺れるたび、その合わせ目で昼の日差しが踊っていた。

青年は窓枠にひじを付き、組んだ両手に額を乗せてじっとしている。頭を垂れたその姿は、なにかに祈りを捧げているようにも見える。

ゆるく弧を描く茶色い髪が、陽に透けて輝き、その光の中で、紅い唇がかすかなため息をついた。

彼は、僕の弟だった。僕は、それが、不思議な気がした。

「颯哉……」

僕は、彼を呼んだ。

彼が顔を上げ、僕の方へやってくる。やはり、それは他の誰かであるような不思議な感覚だった。

「気がついた？ 兄さん」

横たわる僕の傍らに立った彼の顔を見て、驚いた。左頬に、首にかけて大きくガーゼが当てられている。

なぜ、颯哉までがケガをしているのだ。

「颯哉、それ……」

思わず、その傷に触れようとして右腕を上げたたん、激痛が走った。

「動かしちゃダメ!!」

颯哉がとっさに、僕の腕を抑えた。

「5針も縫ったんだ。動かさないで。もし、クラが吹けなくなったら……!」

そこまで言つて、彼は、ハツとしたように自分の手を引つ込めた。僕は、情けないけれど、それを聞いてようやく、自分はクラリネット奏者だったことを思い出した。颯哉の目の前で、一本一本、指を動かして見せた。痛みはあるが、ちゃんと動いた。

「大丈夫。動くよ」

颯哉が大きいため息をついた。

「それで…… おまえのその傷は、いったいどうしたんだ？」

公園で、僕はユージに切りつけられたあと、さらにピック（あれはピックだったのか）を振りかざして僕に向かってくる彼を見た。だけど、そこまでで記憶が途切れている。それからどうなったのだ、と、重ねて聞いた。

颯哉は、ことば少なに話し始めた。

「　　ぼくはあのおとき、夢中で兄さんとユージの間に飛び込んだんだ。だけど、その勢いで兄さんと一緒に地面に倒れてしまった。それで、兄さんは気を失って……腕からはすごい、血が出て……　　ぼくは、びっくりして何度も兄さんと呼んで……」

颯哉は、そのときの状況を思い出したのか、言葉を切って、唇をかんだ。

「でも、ユージはよけい、興奮してしまった。……ぼくが、兄さんをかばったから。」

ユージのすごい声が聞こえて、振り返った時には、もう、よける間がなかった。

タクが抑えてくれたけど、彼は、もう狂ったようになって……」

僕は、聞いた。

「他に、どこを切られた？」

颯哉は、言いくそうに、「背中……」と答えた。

きつと颯哉は、ずつと倒れている僕に覆いかぶさって、僕をかばってくれていたに違いなかった。

タクが呼んだ救急車が来て、やっと騒ぎは収まったらしい。

「ぼくは、たいしたことないんだ。でも、兄さんは傷も深いし、出血もひどかったし……」

医師は大丈夫って言ったけど、腕だから心配で……　デビューも決まってるのに……！」

そう言つてうなだれる颯哉を見て、僕はもう、たまらなかつた。翼を差し出す天使かと、思った。キスをしたくて、上体を起こした。

「兄さん？ 動いちゃ……」

僕を制止しようと、彼が僕の肩に手を伸ばす。その手を捕らえ、頬をガーゼの上から押さえた。

「……っ」

痛みにも、一瞬、彼は口を開いた。そこへ舌をねじ込んだ。そうして強奪した。

颯哉は最初、驚いたのか、小さく抗った。しかし、すぐにおとなしくなり、自分のそれを僕に重ねてくれて、僕にされるままになった。愛しい。たまらない。

僕は、僕の中で暴れている狂つたような奔流を彼にぶつけ続けた。そうして、さらに首筋も奪おうと唇を移したとき、颯哉はそつと僕を押しやり、身体を引いた。

「兄さん、ここ病院だよ……？」

我に返つて颯哉を見ると、唇を歪めて笑っている。彼は、指先で濡れた口元を拭った。指先がかすかに震えていた。奔流が一気に冷水へと変わり、僕の心を冷やした。

「あ…… すまない颯哉。これは、その……」

彼の尊厳など念頭にもなかった自分の未熟さをどう謝り、どう自分の気持ちを伝えたらいいのか、とっさに迷った。

「……………」

颯哉はうつむいたまま、黙っている。

「颯哉、…………その、僕は見たんだよ。帰国してすぐのころ、おまえとタクたちがキスしているところを。」

それで、ずっとおまえたちの仲を誤解していたんだけど、昨夜タクから全部聞いた。

おまえは、おまえなりに彼らの気持ちに精一杯応えていただけだったんだな」

「……………」

「ストリートでおまえが泣いてるのを見たよ。」

……………ひどいこと言って、ごめん」

「……………」

颯哉は、なかなか返事をしてくれない。

「颯哉、僕はね…………、海辺でおまえにキスされたとき、無性に腹が立った。おまえに遊ばれたと思ったんだよ。」

それが、どうしてあんなに頭にきたのか、ずっと考えてた。僕は

……………」

「……………」

僕は何とかして、さっきの乱暴の言い訳と、彼への自分の想いを伝えようとするのだけど、今の彼には、それらはすべて、傍らを通り過ぎる戯言であるようだった。

僕はしゃべるのをやめた。いちばん大事な“おまえが好きだ”というひと言を、今の彼に告げても届かないような気がした。

「……ぼくがあいつらのために、あいつらの気持ちに応えてやってたなんて、ただのキレイ事だよ」

ずっと、黙っていた颯哉が口を開いた。

「気持ちも無いのに触れ合うなんて、許されるわけがないってことくらい、本当はわかってるよ。」

「だけど、あいつらはぼく無しじゃ生きていけないとまで言ってくれたし、ぼくだってあいつらが好きだし……。だからいいんだ、これはあいつらのためなんだって自分で自分に言い訳してた。」

「だけど本当は……。ぼくはただ……。寂しかったんだ。兄さんがいなくなっただけからずっと。そんな時、あいつらがぼくの側にいたんだ」

「でも、それは、……。最後まで、っていうわけじゃなかったんだろっ？」

「そう、あいつらに言っておかなきゃ、自分がどうなるかわからなかったんだ。」

「もしかしたら、誰でもよかったのかもしれないし、もっと、先のことまでしてたかもしれない……。」

「ユージたちに優しくされて、ときどきそのまま慰めてもらいたいと思ったことだって何回もあった。そして、それが兄さんだったら……」

…、なんてとんでもない妄想をした事だっ…！
ぼくは、そういうやつなんだよ。……………兄さんには、わかっちゃ
ったんだね」

やがて、彼のしほり出すような声が聞こえた。

「ぼくが好きだったこと、知られなくなかった……」

第14話 天使のうらはら

僕は、思い出していた。

昨夜の乱闘事件の最中、ユージは僕に、“ソウはあんたが好きだったんだよ！”と半泣きの声で叫んだ。

その時、倒れこんでいた颯哉が弾かれたように顔を上げ、なんともいえない叫びを上げたのだった。

窓際の白いカーテンだけが、吹き込む風にはためく音をたてている。沈黙は、長くは続かなかった。

やがて、顔を上げて颯哉が言った。

「兄さん……」

「ん……？」

「せんせい医師がね。出血がひどかったから、血量が戻るまでここで安静にしていきなさい、って。良くなったら、適当に帰っていいみたい。

……それから、ここに薬が。痛み止めと化膿止め。一日三回、ちゃんと飲んでね。

明後日、また診せに来てくださいって」

それだけ言うと、彼はベッドの足元に置いてあったジャケットを手に取った。そうして、ドアに向かう。

「おい、颯哉？」

彼はドアの前で振り返り、

「ごめんね…… 兄さん」

と、言った。

「どこへ行くんだ、颯哉！？」

彼は、このまま僕の前から姿を消してしまっつもりでいる気がした。僕は、腕の痛みも忘れてベッドから飛び降り、彼を追った。ドアを開け、出て行こうとする彼の腕をつかまえた。

「……」

颯哉は、腕をつかまれたまま、振り向きもしない。

「颯哉……？？」

「だって、これ以上兄さんの前にはいられないじゃない」

「！？」

僕の心のどこかが痛んだ。

「ギョッ！ギョッ！……？」

「兄さんがぼくのこと、……そっぴんぱんに見てるよ悪いや……」

「颯哉！ 誤解は解けたってさつきも言ったろう！？ 僕はもう、おまえの事そんなふうに見てやしない！」

「じゃあ、さつきのキスはなんなの！？」

たまりかねたように颯哉が叫んだ。

「ひどいキスだったよね！？ ぼくがそういうやつだから、そういうふうにしてもいい、って思ってるからでしょう。ぼくは兄さんのこと、好きなわけだし、何したってイヤがったりしないと思ってるんでしょー！？」

「颯哉……！」

僕は、言葉に詰まってしまった。

「バレちゃったんだ、もうなにもかも……！ ぼくがどんな人間か、兄さんにはわかつちやったんだ。

ぼくが……、自分でバラしたんだ。あの時、海岸で……」

高ぶった感情を無理矢理抑えているのだろう。彼の細い肩がゆっくりと上下している。

詰めた息づかいが、静かな病室に響いていた。

やがて、彼はくぐもった声で話し始めた。

「ほんとうのこと言うかね……。ぼくは、兄さんが日本に帰って来てからずっと、おびえてた。この気持ちを知られたらどうしようって。」

ぼくの、……もうどろどろなんだよ。兄さんがドイツに行っちゃってからずっと、寂しさを我慢してる間に、もうどうしようもなくなっちゃったんだよ。さっきも言ったでしょう。ぼくは、タクたちで寂しさを紛らわせようとさえしたんだ。こんなぼくを知って、兄さんがどう思うかと思うと、ものすごく怖かった。こんな気持ちを兄さんに対して抱いているってだけで、申し訳なかった……！」

再会の日の、あの、あまりにもそっけない颯哉の態度が思い出された。それから後も、なんとはなしに僕を避け続けてきた彼。

「だけど、おまえのほうからキスしてきただろう。あの時、海岸で……」

「そう、あの時……」

彼は、顔を歪めて言い淀んだ。

「あの時は、もうすぐ兄さんの引越しだね、って話をしてたんだよ。ね。また、離ればなれになるね、って。

……そうしたら、急にになにかがこみあげてきた。自分で自分が抑えられなくなって、気がついたら兄さんにしがみついていた。夢中で求めた。

きつと、あのときのぼくは、………すごく、淫らだったんだろうね。

突き飛ばされて、ハツとした。どうしようって思った。………恥ずかしかった……」

颯哉は、窓辺ではためく白いカーテンに目をやった。
病室の重い空気とはうらはらの、ゆるやかな風と穏やかな日差しが
差し込んでいた。

「だからね……、さっきここで兄さんが気がつくのを待っている間、
もう、何度このままどこかへ消えてしまおうかと思った。

兄さんに、ぼくが好きだつてこと知られてしまって、あのときのキ
スはただの遊びじゃなくて、……マジで、……本気で兄さんとそう
いうことをしたがつていると思われたと思って……。

兄さんが気がついた時、どんな目でぼくを見るだろうかと思うと、
とてもここにはいらなかった。

でも、腕の事や容態が気になって……、それもできなかった」

「……………」

「拒絶されるんだと思ってた……。ううん、拒絶以上の、……蔑
みとか、忌まわしさとか、そんなものをぶつけられるんだと思って
た。ぼくは男で、弟だから……。

でも、そんな程度じゃすまないくらい、あの時のぼくは……！」

颯哉はふたたび、自らの唇に指先で触れた。そして、ぐいと手の甲
で拭った。

「腕の事だけ確認したら、さっさと出て行けばよかったんだ！ ま
さか、こんな……っ」

彼は、手にしていた空蝉のジャケットを抱きしめた。

自分で自分の心を守るように、背を丸めて腕を抱くその姿に、僕は手を触れることも、声をかける事さえできず、ただ見守っていた。

第15話 おまえには許さない

彼を追って、病室を飛び出した。

と、突然、目の前がかすんだ。

すう、と力が抜けて僕は、駆け出そうとして前に出したはずの足がもつれて、音を立てて廊下に倒れこんだ。

目の奥には、走り去ってゆく颯哉の残像が残っていた。

すぐに誰かが駆けつけてくれ、抱き起こされた。

「どうしました。大丈夫ですか？」

「ああ、すみません。ちょっと立ちくらみが……」

「まだ、急に動いてはダメですよ」

視界はすぐに戻ってきた。

「大丈夫です。もう、帰るところです。家のものが来てくれるので……」

僕は看護師が差し出す手を断って、ゆっくりと立ち上がり、ほら、ね、というように微笑わらって見せた。

「お家のかたというのは、彼……？」

看護師が目線を遠くにやる。廊下の突き当たりで、颯哉がこちらを見ていた。

「ちゃんと、ついていてあげてください」

看護師は僕を颯哉に託すと、足早に去っていった。

「帰るぞ、颯哉」

「ずるいね、兄さん……」

家へ向かうタクシーの中で僕は、颯哉の頬に手を伸ばした。身体を硬くして、じっとしている彼の頬から、僕はガーゼを剥ぎ取った。

「母さんたちが見たら、びっくりするからね。傷は、なるべく髪で隠しておくんだ」

現れた紅い傷跡は、彼の耳の下あたりから白い首筋へと、誘うように伸びている。彼のせいではないのだけど、彼はなにかにつけて、人を惑わせていると思った。

商店街にある“ファーマシーやましな”という薬局が僕たちの実家だ。

タクシーを降り、颯哉を伴って、僕はなにごとくも無かったように、店舗から堂々と帰っていった。

ちょうど、客はひとりもいなかった。父も、どこかへ外出しているのか、姿が見えない。

そして、たちまち、母の大騒ぎが始まった。

<何していたの？ どこにいたの？ ふたり一緒だったの？ どうして、連絡くらいくれないの？ あさってはもう、本試験なのよ！
？>

最後には必ず、これだ。

「悪かったよ。なんでもないよ。

もうすぐ、僕も引越したからね。その前に颯哉と飲みたいな、と思
ったわけだよ。積もる話について、長くなっちゃっただけだ。

こいつがもう、酒を飲める歳になってるなんて、驚きだけだね」

僕は颯哉を庇うように母との間に入り、適当に母に答えながら、奥
の住居へと上がっていった。

「少し、休むよ。しばらく、声かけないで」

しかし、階段の下から母の声はなおも追ってくる。

「颯哉！ あなた、風邪はどうなの？ 今日の予備校はどうするの
？」

颯哉の顔に苛立ちがよぎった。しかし、彼が答える間もなく、客が
来たのだろう、「はい、いらっしやい」と、打って変わった愛想
のいい声で母は店に戻っていった。

二階に上がると、僕は、自分の部屋のドアを開け、自室に戻ろうと
している颯哉に、中に入るよう、目で促した。

「……いやだ」

「じゃあ、僕がおまえの部屋へ行くよ？」

彼は、ムツとしたようだった。僕を睨み、黙って僕の指示に従った。部屋は、長い間留守にしていたせいで、生活感がなく殺風景だ。その上、間近に迫った引越しのダンボールが、そこに積み上げられていて、まるで倉庫のようだった。

鍵をかける音に、思ったとおり、彼は身体を硬くした。

真昼の部屋は、窓から差し込む光で健康的に、明るい。

僕はカーテンを閉めた。黄昏時のような、中途半端な暗がり部屋に満ちた。

僕は、ダンボールを回り、彼の背後に立った。颯哉は、背を向けたまま、振り向きもしない。

「病院の、続き……？」

「……………」

「さつき母さんにも、声をかけるなって、釘を刺してたよね」

彼は精一杯、強がっている。

僕はできるだけやさしく、その身体を背中から抱きしめた。

手の中で、彼の身体が震えた。

僕は、そのままじつと彼を包み込み続けた。接吻も身体をさぐる事もしなかった。

やがて颯哉は、力を抜いた。

「いいよ。……兄さんだもの。もうすぐ、また、離ればなれになるんだしね。……好きにして、いいよ」

僕は、ポケットから薬を取り出した。口に含むと颯哉のあごを引き寄せ、口移しに彼の口の中へ入れた。

「なに、これ？」

「服^のむんだ」

何か、怪しいものではないかと颯哉は警戒して、なかなか飲みこもうとしない。水なしで飲み下すのも、難しい。僕は、唾液を送り込み、錠剤を彼の喉に落とし込んだ。

「病院でもらった痛み止めだよ。おまえも背中^の傷がつかうらいだろ」

そう言って、僕も同じものを飲んだ。

覚悟を決めたといっても、まだ緊張の残る彼の身体を唇からほぐしていく。

こぼれた唾液のあとをたどり、無傷のほうの耳から首筋へと唇を当てていった。彼は、首を傾げ、従順に僕の行く先を開いていった。ボタンを外そうとすると、

「いいよ、ぼくがやる」

と、僕の腕を気遣って、颯哉は自分で自分の胸を開き、僕の前に晒した。

ベッドに横になるよりも、立ったままのほうがお互いの傷のためには楽だった。颯哉は壁に身体を預け、胸にある僕の頭を抱いている。僕は、舌で、指で、そこにある愛しいものを繰り返して慈しんだ。

「……………」

時折、彼は声を殺して、僕の髪をかきむしった。殺風景な部屋の、ダンボールの間を縫うように、彼の吐息が流れていく。

僕は、彼の胸を後にし、跪いた。

次に何をされるのか、察した颯哉が、

「ダメ……………」

と、腰を引いた。

「兄さんは、……………そんなことしちゃ、いけない」

悲鳴のようなささやきだった。

第16話 おまえには許さない 2

「どうして、ダメ？」

僕は、ジーンズの上から口付けた。彼は、ひときわ身体を震わせ、甘い吐息の混じる声で叫んだ。

「ダメ……ッ！ だって、どうして好きでもないヤツのなんか……。そんなことしたら、兄さんが……。ぼくが、……する」

颯哉は身体を屈め、僕より低い姿勢をとろうとした。

「ダメだ……！」

今度は、僕が拒絶した。

「おまえには、許さないよ」

彼を見た。どういうこと？ と、見開いた彼の瞳が聞いていた。僕は、その瞳に命令した。

「ベルト、外して」

「え……？」

「僕にさせるの？ ボタンは自分から外したくせに……？」

颯哉は、僕の目の前でベルトを外した。

続いて、ファスナー。そして、下着を降ろすところまで、自分でさせた。

痛み止めが効いてきていて、それほど腕が痛むというわけではなかったけれども、颯哉は逆らわないとわかっていて、僕は命令を下した。そして、その僕の思惑にたがうことなく、従う颯哉。

不思議な感覚に支配された、不思議な関係だと思った。僕たちが男同士だから、だろうか。それとも兄弟だから、だろうか。僕は、最後の命令を下した。

「口を、ふさいでいろ」

「!？」

「今度は、我慢できないよ」

僕は、彼を包み込んだ。

「……っ」

彼が感じる場所に、惜しげもなく舌を当てていった。彼が、身をよじり、必死で耐えている気配が、たまらなく愛しい。彼が、イイのなら、いつまでもしてやろうと思った。

そのかわり、ふさいだ口から声が漏れたときは、中断し、立ち上がって軽く頬を叩いた。

「階下したに聞こえたらどうするの!？」

僕は、決して冷たい性格ではないはずだった。なのに、どうしてか彼に対しては、ひどいことばかりしてしまう。もし、彼が女性なら、こんな嗜虐的な気持ちになることなどあるはずも無いどころか、無条件で可愛く、大切に守りたいと思うのに違いないのだ。

僕は男として、そして、7歳も年上の兄として、颯哉に対して尊厳を保つ必要があった。

彼が従順なのは、僕の弟として、僕のそんな立場を本能で分かっているからかもしれない。

彼の態度は、僕のそれを十分に満足させてくれる。僕は、心のどこかで彼を哀れに思った。僕たちが、兄弟であるばかりに、と……。そして、この高圧的な態度をやめられない僕は、彼への負い目から、せめて彼を、この上もなく愛してやろうと思うのだ。頬を押さえ、僕を睨んだ颯哉を、僕は再び叩いた。

絶頂が訪れたのだろう。

「もう、やめて、兄さん……!!」

颯哉があえぎながら、言った。

僕は、かまわず舌を動かし続ける。

「やめてっ! もう、出ちゃう……っ!」

焦った声を上げ、逃げようとする颯哉。僕は、彼を押さえつけ、逆に舌先に力をこめた。

「ああ……っ」

彼の放ったものを、僕はすべて受け止めた。

足元に崩れ落ちた颯哉の、白い背中が傷を覆う白いガーゼとともに震えている。

余韻に浸っているのでは、ない。

彼が何を思っ、うずくまり、震えているのか、僕にはわかる。

だから、まだダメなのだ。おまえがそんな思いに囚われているうちは、まだ許すわけにはいかない。そう、思った。

やがて、彼はゆっくりと顔を上げた。

（ごめんなさい）と、言うのかと思った。が、言わない。

卑屈な感情に支配されているだけかと思ったが、意外と意地を見せた彼のその在り方が、僕の満足感をくすぐった。

また、心の奥底で、もう少し責めてみたいという気持ちがチラリとかすめた。

颯哉、おまえはやはり、イケナイね。

僕が今、どれだけ嵐のようにおまえを征服したいのを抑えて、おまえを導こうとしているのか、いずれ、いやというほど教えてやる。

颯哉は、無言のまま見つめている僕の視線を受けながら身体を起すと、僕の足元に跪いた。僕は立ったまま、じっとそれを見ていた。彼が、僕の腰に手を掛ける。

「何をしている？」

「今度は、ぼく……でしよう？」

(ごめんなさい)の代わりに、彼は言った。
僕は、彼の手を振り払った。

「おまえには、許さないと言ったはずだよ」

そう言われるだろう事を、ある程度予測していたのだろう。彼は何も言い返さず、素直に手を降ろすと、ただ、唇を震わせた。

僕の口中で果ててしまうという失態を犯した彼は、それを償おうと、同時にイカされるといふ辱めを受けた屈辱を押し殺して、僕の足元に膝を屈したのだ。

それを、僕はにべもなく拒絶した。

彼は、どうせ、こんな異端の自分に触れられては汚れてしまうと思われた、とか、そんないじけた考えをさらに増したのに違いなかった。

「どうして、許してもらえないか、わからないんだろう？」

「……………」

「わからないのなら、わかるまで、するよ」

「え…………？」

(おまえの、その卑屈な考えが徹底的に矯正なおするまで)

僕は、(なにを?)と、聞きかけた颯哉を立たせると、ふたたび最初から彼の身体をたどりはじめた。

第17話 生え変わった翼で

僕は、再び始まった行為の意味がわからず、抵抗しようかどうしようか戸惑っている颯哉の唇を捕らえた。

最初の時より、もっと優しく。そして、もっと、よくしてやった。

「ん……っ」

絡めて良いのか悪いのか、わからない颯哉はもどかしそうに身じろいだ。

まだ、冷めきっていない身体は、またすぐに熱を帯びてくる。

何故、再びこんなことをされるのか、彼はわからないままにいる。

わからないまま、僕の求めに応じて従順に、再びその身体を開いていく。

いや、おまえはわかったつもりでいるのだろうけど、それは間違っているよ。

おまえは心の中で、僕に対するさまざまな負い目 自分

は7歳も年下の、出来の悪い弟で、そんな自分が僕に対して邪な想いを抱いたことそれ自体と。そしてそのことで僕に不愉快な思いをさせてしまったということ。あるいは最初に誘ったのは自分のほうだからとか、自分のせいで僕に怪我をさせてしまったからとか

を勝手に感じていて、僕が要求するなら、そのせめてもの償いに、自分の身体を提供するのも仕方がないと思っっているのだろう。

その証拠に、僕が彼の官能をくすぐるたび、かすかな声を上げながらも、彼の身体は、どこまでも、どこか硬かった。

そして、いつ、この前戯が終わるのか、構えているようだった。

哀れな颯哉。

僕に対する、それから自分の恋に対する負い目を、4年の間に自分の中に厚く厚く降り積もらせ、堆積したそれに内側から押しつぶされ、そして外側からは両親の期待で締め付けられて、息もできなくなっている。

楽にしてあげるよ。僕が、今。

僕がおまえに施しているこれが何なのか、間違っているおまえの解積を矯正してやる。

僕は、彼を縛っている背徳と負い目でなわれたロープを一本一本解きほぐすように唇と指を当てていった。

彼が、縛めから解放された快感に身じろぎ、詰めた息とともに内側に溜めたものを漏らす。

僕は繰り返し、施した。

その間、颯哉は僕に咎められる前に、自ら口をふさいでいたが、ついに耐えかねたように僕にしがみついていた。

「あ……、兄さん……っ！」

身体を押し付け、その熱を伝えてきた。

「なにか、わかった？ それとも、もう、我慢できないの？」

「ガマン……できない。もう、止めて」

「なにか、わかったわけじゃないんだね？」

「だって、何をわかつたらいいのか、わからない」

僕は、しがみついている彼の腕を外し、言った。

「じゃあ、ダメだ。続けるよ」

「……………っ」

彼の悲痛な叫びがひとつ、漏れた。

「颯哉……………」

「……………？」

「いい？ ただ、感じるんだ。僕を感じているんだ。……………いいね」

僕は、彼に触れた。小さな悲鳴が上がる。快感から逃げようとする彼を僕は追い、さらに蠢かせた。

「あ……………っ やめ……………」

「逃げるな！僕を感じろ、颯哉！」

早く気付け。

僕の想いに。僕も、おまえと同じ、この背徳かもしれない恋に身も心も灼かれていることを。

やがて……

荒い息の下、颯哉が絶え絶えに聞いた。

「どうして……？」

「……………」

「どうして、してくれるばかりなの……？」

「……………」

「どうして優しくしてくれるの？ よくしてくれるの？ ……

……ぼくを、やるんじゃなかったの？」

僕は、僕の想いがやっと颯哉に届きかけているのを知った。

「イイんだ。 すごく……。 なんだか、幸せな気持ちなんだ。

もう、やめてよ。 勘違いしちゃうよ。 なんだか、まるで……………」

「まるで……………？」

「愛されてるみたいだ……………」

僕は立ち上がり、颯哉をそっと包み込むように抱きしめた。

「やっと、わかった……………？」

颯哉が、驚きに小さく息をのんだ。

それから、彼は僕の胸に顔を埋め肩を震わせた。 しばらく、そうし

ていた。

「うそだ…… そんな、まさかだよ……」

颯哉の声は、涙声だった。

翌日、颯哉は小さな鞆をひとつ下げて、僕の部屋にやってきた。

「荷物、それだけ？」

「うん。 このあと予備校に行くふりをして、そのまま行くよ……
母さんたちに心配いらない、って言っといってくれる？」

「入試は……？」

「行かない。 …… どうせ受からないしね」

彼は笑った。 迷いのない笑みだった。

昨日、あれから僕たちは、とうとうひとつになった。
やっと通じ合えた僕たちは、お互いの想いのたけを繰り返し、交し
合った。

「ずっと、好きだったんだ……」

僕の腕の中で、颯哉はずっと、泣いていた。

服を着け、カーテンを開けると、西日で部屋が赤く染まった。颯哉は目じりを拭いながらベッドを降りると、そっとドアを開け、階下の様子を窺った。人の気配が無いのを確かめると、僕を振り返り、

「明日、この家を出ていくよ」

と、笑みをひとつ残して部屋を出ていった。

「家を出て、どうするんだ？」

僕は目の前に立つ彼を見た。一夜明けて、颯哉は綺麗だった。今までの月光に浮かび上がる美しさは消え、今は陽光を浴びて輝いているように見える。

「やっぱり、歌を追いかけてみようと思う。今までどおり、路上で歌ったり、自主レーベル作ったり。……コンビとかでバイトしながら、ひとりでやってみる」

「ひとり？　じゃ、やっぱり解散するのか？」

「ユージも、ホントはわかってるんだ」

「何かあったら、連絡しろ」

僕は自分のケータイ番号と、これから住むマンションの住所をメモして渡した。

積み上げられたたいそうな荷物を背に、母が用意してくれたマンシ

ヨンのアドレスを渡すのは、何のはなむけも無しに、ひとり旅立つ弟に対してひどく後ろめたかった。

なにか、彼にしてやれる事はないかと頭を巡らした。が、

「応援している。おまえなら、大丈夫だ」

と、僕は本気で思っているけれども、彼にとってはなんの足しにもならないだろう、気休めのような言葉しか出てこなかった。

「あの時、路上で歌っていた曲。……おまえ、途中で泣くもんだから、最後まで聴けなかった……あの曲、良かったよ。あれ、くれよ」

颯哉は一瞬、恥ずかしそうに微笑んだ。

しかし、鞆の中から一枚のCDを取り出すと、僕に差し出した。ジャケットなど、もちろん無く、盤面にはマジックでタイトルが書いてあるその一枚を僕は受け取った。

それから、僕たちふたりは堂々と店に降り、僕は「予備校まで送ってくるよ」と、父の車を借りた。

助手席の窓から、次はいつ帰ってくるかわからない我が家を、颯哉はいつまでも振り返っている。その顔には期待を裏切ってしまった両親への詫びしらが浮かんでいる。

「親父たちの説得は、僕に任せておけ」

僕はそう言って、アクセルを踏んだ。

ほんのひと月ほど前、中学生だった弟の面影を懐かしく思い出しな

がら帰郷してきた道を逆にたどり、その時4年ぶりに降り立った駅の前までやってきた。
プラットホームまで見送ろう、と言ったが、颯哉は断った。
仕方なく路肩に車を止める。

「じゃ……」

と、カバンを手にし、颯哉が僕を見た。僕も彼を見つめ返す。
最後の口づけを交わそうと思ったが、やめておいた。

「落ち着いたら、連絡先を教えろよ」

と言つと、

「いつになるか、わからないよ」

と、彼は笑って答え、車を降りた。

駅の構内に消えてゆく彼を、僕はいつまでも車の中から見送っていた。

彼がどこ行きの列車に乗ったのか、僕は知らない。

数日後、僕は僕の新天地、市にやってきた。

母が探しておいてくれたマンションはすぐにわかった。なんと駅から歩いて10分ほどの所にあつた。綺麗なマンションだ。1階にコンビニが入っている。

その日は、荷物をほどいていて、あつという間に夜になった。
階下のコンビニに食料の調達に行く。

扉を開けると、レジに立っている若い子と目が合った。

弁当を物色しながら颯哉の事を想った。彼もコンビニでバイトしながらチャンスを待つ、と言っていた。たった今も、僕の天使は僕の知らないどこかの道端で歌っているのかもしれない。

商品をカウンターに持っていき、目の前でレジを打っている若い男の子を、思わずじっと見つめる。

颯哉よりもずっと年下のようだ。この子も何か事情があって、こんな深夜に頑張っているのだろうか。おつりと商品の袋を受け取って、

「ありがとう」

という言葉に、彼へ、そして颯哉へエールの気持ちを込めた。

「道端に立つ天使」 END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1236o/>

道端に立つ天使

2011年12月29日09時47分発行